博士学位論文審査要旨

学位申請者氏名　伊藤　拓也

論文題目　戦国大名の領域支配構造

審査委員（ 職名・氏名・印 ）
主　　査　教授　有富　純也
審査委員　教授　今田　絵里香
　　名誉教授　池上　裕子

論文審査結果（ 合　否 ）

論文審査の要旨

この論文は、戦国時代における、北条早雲を始祖とする北条氏がいかに領域を支配したかについて、「支城制」というキーワードを用いて考察する論文である。「支城制」とは、いわゆる戦国大名の北条氏が領国すべてを直接的に支配するわけではなく、各地域―主に現在の神奈川県から埼玉県の地域―の拠点となる城に領主に支配を任せることがあり、各地域にそのような「支城主」が存在する。かかる「支城主」を置くあり方を「支城制」と呼ぶ。とはいえ、「支城主」の出自も地域によって多様であり、また、それぞれの領地において支配のあり方も異なっている。その点を膨大な先行研究や一次史料を用いて明らかにする、労作である。

当論文は、序章、第Ⅰ部のなかに第一章から第三章、第Ⅱ部のなかに第四章から第六章、そして最後に終章がある。序章では、主に北条氏や支城制に関する研究史を整理し、また家臣や服属領主といった、学術用語の定義を行っている。第Ⅰ部は三代目の北条氏康以前の領域支配のあり方を論じ、第Ⅱ部は四代目の北条氏政以後の領域支配のあり方を論じている。そして、章ごとに、それぞれの地域にどのような支城主がおり、どのような支配のあり方だったのか、６つの地域を検討するものである。まず第一章は「小机領」である。本家ではない北条氏が支城主になり、現地の領主と主従関係を結び彼らを家臣団とする支配構造を見出す。次に第二章の「江戸領」の支城主は、遠山氏や北条氏と時期によって変遷するものの、家臣団を形成せず、現地の領主たちを「同心衆」として扱う。第三章「津久井領」では、もともと現地の領主であった内藤氏を支城主として領域支配をしていたことを明らかにする。第四章「滝山領」では、もともと上杉氏と北条氏に両属してい

た大石氏は、河越合戦以後に北条氏に属し、また北条氏から養子を迎えて北条氏照を支城主としていただいた。その後、滝山にいた武士たちは支城主の家臣団かつ「同心衆」となる。第五章「鉢形領」では、藤田氏に入り婿をした北条氏邦が支城主になり、もともと存在した領主たちを家臣団として形成する。また、本章では貫高制についても詳しく論じている。第六章「上田氏の松山領」は、岩付太田氏から奪取した松山領について、上杉氏との境目争いという政治的な緊張関係も論じつつ、上田氏が支城主になった状況を論じる。

終章では、これまでの議論をまとめ、最後に戦国大名は強固な支配を貫徹する安定的なものであるというあり方と、多様で不均衡・流動的な支配をせざるを得ない不安定なものであるというあり方という、２つの相反するあり方は、戦国大名の支配のなかでは共存すると結論づけた。また、予備審査の際に提出が求められ、実際に本論文提出の際に合わせて提出された「参考論文」では、北条氏のみならず、武田氏・朝倉氏・佐竹氏・毛利氏・織田氏の支配構造についてこれまでの研究を整理し、北条氏の領国が他氏と比べて安定した支配構造であったことを論じた。これにより、北条氏以外の戦国大名支配のあり方についても伊藤氏がこれまでの研究を把握しており、十分な知見があることが明らかとなった。

近年の戦国期研究は、武将個々人の誕生から死去までの経歴を精緻に追い、母親が正室だったか否かなど、人物に焦点を当てた「実証」研究が盛んになっているが、本論文は、近年の研究であまり取り上げられなくなった大名領国全体の構造を明らかにしようとした試みとして評価できる。この大名領国全体の構造、特に北条氏の領国については、重厚な先行研究が蓄積されており、新たな知見を提示することは難しい。しかし伊藤氏は、史料を博捜しつつ、丁寧に史料批判をおこない、そしてそれを正確に読むことで、新たな知見・論点の提示に成功している。もちろん、いくつかの史料の理解については審査委員と意見を異にするものもあったが、重大な瑕疵ではないことが確認され、本論文によって当該分野の研究が進展したことは間違いないだろう。また、本論文の成果により、伊藤氏は「中世と近世の連続性を重視する」立場にあることを表明したが（参考論文７頁）、この点については研究者によって意見が分かれるところであろう。建設的な論争が巻き起こることを期待したい。

その一方で問題点もいくつか指摘された。まず、用語の定義が不明確な場合もあった。例えば、本論文は支配のあり方が重要な論点であり、「同心衆」や「主従関係」といった言葉は重要なキータームになる。しかしそれらをしっかりと定義せずに用いている部分もあった。さらに、他の章と比較して第五章「鉢形領」が突出して長いものとなっており、博士論文自体のバランスが失われている。

とはいえ、用語に関しては戦国時代・北条氏研究に馴染みのない研究者には不親切であったかもしれないものの、専門に近い研究者であれば自明のことであり、大きな問題とは言えまい。また、第五章に関しては逆に「鉢形領」研究に対する著者の熱意が感じられ、伊藤氏による詳細な研究が、今後の研究史上、重要なものになるに違いない。

このように、いくつか問題点はあるものの、全体としては北条氏が支配していた地域のあり方について詳細な検討をしており、今後の研究に寄与するものであることは間違いない。よって、本論文は博士の学位を授与するのにふさわしい論文であると判断した。